クセッケ！！

瀬利　無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クセッケ！！

【Ｎコード】
Ｎ２８４２Ｉ

【作者名】
瀬利　無音

【あらすじ】
女の子のような顔を持った少年『滝田凛』
だが凛にはあるコンプレックスがあって……
凛と同じクラスでいつも一緒にいる、バカの佐伯、ナイスガイの櫻井の三人で繰り広げられるドタバタ青春コメディここに開幕！

プロローグ

顔を出したばかりの太陽
思い詰め一人佇む少年
遠くを見つめる瞳
そして、海、強い風、飛沫をあげて打ち寄せる波、クセのある潮の匂い
それらすべてに伴って渦を巻いて荒れ狂う

……髪。

そう髪なのだ。
それはもう荒れ狂っているのだ
そう、湿気にめっぽう弱いクセっ毛と呼ばれるもの
それも少年のクセっ毛は日本人の中でずば抜けるほどのクセっ毛、
アフリカ人のくりくり頭と大差はない（それは言い過ぎ）
そして、その髪は目を完全に被っていて少年がどのような顔なのかを分からなくするほど

少年はくりくりになるのが嫌で抵抗しているのだろう…

伸ばして、伸ばして、伸ばして

ストレートパーマという一つの希望、いや光に向かって伸ばしているのだ

しかし、間に合わなかった

あと少しだったのに

結局間に合わなかった

高校デビュー

そうそれは、中学まで埋もれていた男子や女子が起死回生をかけてチャレンジするもの

その晴れ舞台は2日前、結局高校デビューの為に伸ばしていた髪は間に合わず、あだ名はクリボーになった

繰り越しできるリボ払いのコマーシャルを見るたびに辺見〇ミリに鋭い視線をおくってしまう

あと2日早く生まれていたらこんな事にはならなかったのに、と親を責めない日はない

そして、一番の悲劇はこの町に越して来た事

前の町には生まれた時からいた為１５年は住んでいた

幼稚園、小学校まではいじめられたり悪口を言われたりしていたが

中学校になると皆も慣れてあまり弄ってくるヤツもいなくなったのに

引っ越しする事により人生２度目の苦痛を強いられている

『神様のバッカやろうーーーーー』

この物語はこの少年、人生初の雄叫びをあげたクリボーこと滝田凛

の学園物語である

ショッピング

サクラが満開に咲いている今日この頃
風は春の匂いを運び、サクラの花びらを舞い上げ頬をくすぐってくる
ああ、今日もいい一日になりそうだな
と普通の人なら思うのかもしれない
だが僕はそうではない
サクラが満開に咲いてしまってる今日この頃
風は春の匂いを運ぶついでにサクラの花びらを舞い上げ僕の髪にメチャクチャ絡めてくる
この！この！全然取れない！
あぁもう、今日も最悪の日になりそうだ
と思うのがくせ毛で悩む僕の春の風景である

『おい、クリボーどんだけサクラ頭に付けてんだよ。お前の頭はサクラの木か！』
『うるさいな～いいから取るの手伝ってよ』

朝から前の席から絡んでくるこいつは、入学して初めての友達

佐伯高貴

入学当初、クラスのほとんどが僕のクセっ毛を遠目でみてバカにしている中

前の席だった佐伯は、いきなり振り返って声をかけて来て

『それ、おしゃれだなぁ！なにパーマ？』

と失礼きわまりない質問をしてきた超弩級のアホである

案の定、みんなに爆笑され、これで完全にバカにし続けられると思ったのだが

ここが高校の不思議なところである

なぜかいい感じに弄られるようになり今ではマスコットキャラのような扱いになっている

おかげでクラスにも馴染む事が出来て結果的には佐伯のおかげで良い高校生活を送れるようになった

佐伯がサクラの花びらを取ってくれてるときに隣の席の2人目の友達が登校してきた

『お、また朝からやってるな。お二人さん』

そう言うと机にどさっと鞄を置く

『サクちゃんじゃん☆おっはよー』

佐伯が気さくに話しかけた、サクちゃんこと櫻井健一は佐伯の中学からの同級生らしい

佐伯とは違い大人の魅力たっぷりのナイスガイだ

まだ一ヶ月しかたってないのにもうファンクラブがあるらしい

『今日、朝から小テストあるのに佐伯はそんな事してる余裕があるほど勉強したのか？』

櫻井がそれとなく聞いた

『……忘れてた…』

凛の髪に付いた最後のサクラの花びらを取ったところで佐伯は真っ白になっていた

『お前この間も忘れてて赤点で怒られてたじゃねーか。また今日も呼び出しくらうぞ』

櫻井が英語の教科書で軽く佐伯の頭を叩く

すると、佐伯がハッと何かに気づいたようだ

『ま、まさか、クリボーは俺にこんな事やらせておいて勉強して……』

ないよなと聞こうとして佐伯が視線を凛の頭から机に向けた

予感は当たっていた

そこにはこれから行われるであろう英語の小テストの範囲ページを広げながら勉強している凛の姿があった

『ん？さっきから勉強してるよ？』

凛が顔を上げて言ったその言葉を聞いた時の佐伯の顔はもはやムンクよりもムンクらしい顔になっている

口をぱくぱくしながら何か言っている

『ショ……ショッ…ショッピング……』

ショックのあまりリアクションが外人になったようだ

『惜しいな、ショッキングだ』

冷静にツッコミを入れる櫻井はさすが中学からの付き合いなだけはある

僕だけでは対応できない状態だった

佐伯は、その後ものすごい勢いで勉強し始めたが、間に合うわけもなくテストは予想通り撃沈だったらしい

途中で早々と机に突っ伏していた

屋上の昼休み

屋上から見える景色に学校の生徒達の音が交われば何とも言えない心地よさがある

それに太陽の日差しと購買のサンドイッチでお腹を満たせば、午後の授業は全部お昼寝確定だ。

と、いつもならそうなる人が今日は違った

その人は猛烈に怒っている

それはもうブルース・〇〇ルスが眉間にしわを寄せているときの如く怒っている

『英語とは一体なんぞや？』

その怒っている人はグラウンドを見下ろしながら肩だけで着た学ランを風にバタバタとなびかせ背を向けて言った。

言ったのは当然いつもオチャラけている佐伯で、言われたのはナイスガイの櫻井とクリボーこと凛の二人

二人はかれこれ十分以上正座させられている

『これいつまでやらされんの？』

佐伯には聞こえないように隣のナイスガイに凛は聞いた

『さぁ？でもそろそろ面倒くさくなってきたな。俺の予想では佐伯もこの先のゴールは見えてないはずだ』

ええええ！

胸中で凛は叫んだ

ヘタをすれば昼休み全部を使って、このグダグダな説教につき合わなければならないではないか！と

そして、凛は櫻井から佐伯に視線を移し衝撃の光景を目にする

風になびいていて気づかなかったが、佐伯の足は

風に関係なく尋常じゃないほど震えていた！

凛は理解した！

佐伯はこの後グダグダになって僕たちに怒られるのを恐れている

正確にはナイスガイを恐れている！と

ーーこの時の佐伯の心境

屋上から見える景色に学校の生徒達の音が交われば何とも言えない心地よさがある

それに太陽の日差しと購買のサンドイッチでお腹を満たせば、午後の授業は全部お昼寝確定だ。

と、いつもならそうなるはずだったのに……

なんでこんなことになっちまったんだ…

さっきのことなんて全然怒ってないのに

ノリで怒ってる振りをしたら面白いかな？とか思っちゃってやったら、歯止めがきかなくなって屋上まで呼び出しちゃったよ……

だれか中村俊輔のサイドからのパスのように俺をこの先にあるゴールに導いてくれーーー

ていうか、クリボーはともかくサクちゃんぜってーイライラしてるよー振り向くの怖ぇーー

そうして結局、佐伯が振り向く事は最後までなく、いつもなら、昼休み終了のチャイムが絶望を知らせるように学校中に鳴り響くように聞こえるのに

屋上の3人には終わりの無い戦いに響く救いの音に聞こえたのだった

チャイムが鳴ったのに、まだ怖がって振り向かない佐伯に対し、スッと立ち上がった櫻井が佐伯の肩に手をかけ語りかけるように喋った

『俺が怒ってるように見えるか？』

なぜかまだ継続して土下座をしている凛に聞こえるかぎりでは怒っている様子ではない

佐伯もそう判断したのだろう

『サクちゃん…』

と涙声で櫻井の方に振り向いた

誰もが感動の瞬間を迎えるのだろうと思ったその数瞬後

佐伯は世界で最も美しい土下座をしていた

いや、もはや低姿勢になりすぎて寝下座になっている

佐伯の土下座前の顔を見た凛はすべてを理解していた

櫻井はメチャクチャ怒っていたのだ…

それもものすごい顔で……

目撃者の凛曰く

振り向いて櫻井の顔を見た佐伯の顔は

ピカソ作のゲルニカに出てくる馬の顔にソックリだったという……

携帯チャット

地獄の昼休みが終わりを告げてから2時間後

今彼らは6時間目の授業を受けながら

佐「放課後ナニするかは大丈夫だな？」

櫻「ナニをカタカナにするんじゃねぇ！なんか変な事に見えるだろ！」

凛「変な事ってなに？」

佐「クリボーは知らなくていい！お前は真っ白のままでいてくれ…」

櫻「お前凛をなんだと思ってるんだよ」

と言う風に携帯でチャットをして話していた

今回は彼らの携帯チャットの内容を見てもらうとしよう

凛「ていうか今日ナニするんだっけ？』

櫻「凛！お前は使うな！」

佐「一体誰がお前を汚したんだ！！」

櫻「お前だろ」

凛「ところで今日の予定って？」

櫻「それは佐伯の方から説明してもらう」

佐「お任せガッテン！」

櫻「お前何かと残念だな」

凛「残念の固まりだ」

佐「残念っていうなぁ～泣」

佐伯さんが退室しました

凛「え？」

モンブランさんが入室しました

櫻「…」

凛「…」

モ「…」

モンブランさんが退室しました

佐伯さんが入室しました

櫻「空気は察したな？」

佐「はい…痛いくらいに」

櫻「とりあえず話を進めてくれないか？」

佐「お任せガッテン！」

凛「立ち直り早っ！」

櫻「…」

凛「…」

櫻「そして、打ち込み遅っ！斜め後ろの席だから打ち込んでる姿丸見えで切ないな…」

凛「後ろから見ても切ないわ」

佐「ジャジャーン！！今日の私たちの放課後活動内容はクリボーに変をさせようです！」

凛「テンションの違いにビックリだね。てか変？」

櫻「多分恋の間違いだ」

佐「…」

櫻「しかも、お前書いて間違えるならまだしも打ち込んで間違えるってどういうことだよ」

凛「それに、打ち込みにかかった時間と文の長さの割の合わなさ」

佐「…」

櫻「携帯置いて机に突っ伏すな！」

佐「だってよぉ。責めすぎだぜぇ。泣」

凛「ごめん、ごめん！元気出して☆」

佐「凛はかわいいなぁー▲」

櫻「元気になったのは良いけどなんで▲を使う？」

佐「凛が☆つかったから俺もと思って…」

櫻「せめて♪とかにしろ！」

佐「せめて♪ってなんかエロいな。笑」

凛「死んでこい」

櫻「上に同感」

凛「お、佐伯が先生に当てられた！笑」

佐「なんぺーじおしえ」

凛「めっちゃ焦ってる。笑』

櫻「５３ページだ！」

凛「笑」

櫻「笑」

佐「お前らヒドすぎ！」

櫻「５３ページなんて入学して一ヶ月しか経ってねーのにいくわけねーだろ。笑」

凛「笑いすぎてお腹痛い～笑」

キンコンカンコーンキンコンカンコーン

チャイムが本日最後の授業の終了を知らせる

『マジでアホだー』

授業が終わり凛が笑いながら言った

佐伯はがっくりと机に突っ伏している

そんな佐伯に櫻井は肩を叩いてこういった

『お前に生まれなくて俺は本当に良かったと思うよ』

この後、佐伯がどうなったかはいうまでもあるまい

ついにストパー

6時間目が終了しホームルームもいつも通り特に話も無く僕らは帰る準備をしていた

『おい、帰るぞ』

櫻井が肩に鞄を掛けながら俯いて座っている佐伯に言う

『面白かったからいいじゃん』

凛が後ろの席で鞄に教科書を入れながら佐伯を励ます

『最近の俺の立場ってなんなんだよ…』

めんどくさいほど落ち込んでいる佐伯

『え？そりゃぁ』

櫻井と凛が目を合わせ声を揃えて言った

『ボケ要員でしょ？』

『ボケ要員だろ？』

それを聞いた瞬間、佐伯の目からはブワっと決壊したダムのように涙が流れだした

『サクちゃん、クリボーヒドいよ～』

凛は心の中で叫んだ

めんどくさっ！

櫻井も心の中で思った

なんでこいつと親友なんだろ？

『帰りにアイス買ってやるから取りあえず帰ろうぜ。凛のアレもあるし』

『うん、わかった』

こいつはどんだけ子供なんだ…

凛は不意に佐伯の今後がとても心配になった

『取りあえずドラッグストア行こうぜ』

櫻井がそう言ったところで僕たちはドラックストアに向かうことにした

『おい、どれにする？』

『そりゃ激継続！って書いてるこれでしょう』

『僕あんまり傷むのは嫌だな』

三人はある棚の前で必死にあるものを吟味していた

それは……

ストレートパーマ液！！

そう、凛の髪は入学式から1ヶ月が経過しついにストパーをかけれる長さに到達していた！

『これで明日学校は騒然とするだろうな』

『あぁ、間違いない。』

櫻井と佐伯はニヤニヤと気味の悪い笑みで凛を見る

なぜ二人はニヤニヤしているかというとそれは2週間前にさかのぼる

『さぁ、クリボー俺にお前の素顔を見せてくれ！』

『お前気持ち悪いな…』

『僕もそう思う』

三人は放課後の教室で黒板の前で何やら話している

『だってその前髪の下にどんな顔が隠れてるのか気になるんだよー』

佐伯は子供のように地団駄を踏みながら訴えてくる

『そんなに期待したってきっとブサイクだぞ』

『ひどっ』

この時はまだ櫻井と凛は知り合ったばかりで仲があまり良くなかった

『俺もそうだと思うけどよ〜』

こいつにいわれると癇に障る

『どうしても見せなきゃダメなの？』

『ああ、俺らがお前がストパーをかけるべきか否かを答えてやる。』

このナイスガイは一体何様なのか

そんな事を思っている最中凛は背後からいきなり捕まえられ体の自由を奪われる

『サクちゃん！今のうちだ！』

『佐伯コノヤローはなせー』

明らかに佐伯より体の小さい凛の抵抗は小学生が大人に抵抗しているようなものだ

『俺は、あまりこういうのは好かんがいたしかたない。ご免！』

そういうと櫻井は凛の前髪をガバっと上に上げた！

…

……

……

教室に沈黙が流れる

『……サクちゃん？』

居たたまれなくなった佐伯が思わず口を開いた

『お…』

『お？』

佐伯と凛はその言葉に復唱する

『俺は…』

『俺は？』

……

『信じないぞー！！！』

櫻井のいきなりの咆哮

ナイスガイが叫んだーーーーー！！！

凛と佐伯は初めて心がシンクロした

『どうしたんだよ！サクちゃん！いつものクールさが微塵も感じられないじゃないか！よし！クリボー俺にも見せろ！』

佐伯が凛を自分の方に向けて前髪を上げる

自ずと背の小さい凛は上目遣いで佐伯を見る事になる

佐伯は言葉を発さないまま口をぱくぱくさせている

かたやナイスガイは床にうな垂れている

凛は思った…なんかめんどくさい事になってるな、と

まぁ、この二人の反応を見れば分かるように凛の顔は想像を絶していたのだ

それはブサイクで？

いや違う

じゃあカッコイイ？

それも違う

残るは…そうあれしかない

メチャクチャ可愛いいいいいいいいいいいいいいのだ！！

それはもう男の顔ではなかった

女の子の中にいても上位に食い込むであろうその顔は

いつも鼻から下しか見えていなかったがよく見ると鼻はある程度高くすっと筋が入っていて唇にいたっては女性的な薄いアヒル口で可愛らしく

隠れていた目は奥二重でパッチリそして右目の下には泣きぼくろというオプションが付いている

そして、ずっと影に潜んでいたからこその白い肌！

学ランさえ来ていなければ男とは分からないだろう

『こんな、こんな事があるのか…』

少し冷静になった櫻井がもう一度マジマジと凛の顔を見る

『な、なんだよ』

『お前、モロッコ行って下のいらないもん取ってこい』

真顔で意味の分からない事を言うこの変態に凛は一応ビンタをした

『……俺が今まで見た美女の仲にお前が入ってもベスト3には入る顔なのにもったいないじゃないか！』

まだ言うかと2度目のビンタをお見舞いする

『？』

凛は気づいた。美女？

『もしかして、僕の顔って不細工じゃないの？』

『バカやろうが！風呂とかで自分の顔見ないのかよ！』

『僕ん家お風呂に鏡付いてないんだよね…』

『洗面台の鏡は！？』

『家に洗面台ない……いつも外にある井戸の水で顔洗うし』

『井戸っていつの時代の人だよ！ここ都内ですけど！』

このやり取りの中ぴくりとも動かない人が一人隅っこでまだ口をぱくぱくさせている。

『俺の親友をあんな風にしやがってどうしてくれんだよ！いつものバカな佐伯を返してくれよ！』

『し、知らないよ！僕のせいじゃないでしょ！』

『頭もじゃもじゃのくせに可愛く生まれてくるんじゃねーよ！』

『もじゃもじゃなんだからせめて顔くらい良くていいだろう！』

二人の一歩も引かない討論は３０分は続いた

その日から、櫻井とは打ち解けたので良かったのだが、佐伯に関しては次の日会ったときには女を相手にするかのような態度に変わってしまい、気持ち悪い事この上ない状態になっていた。

そして現在…

『お会計１２００円になります』

１２００円か、と財布からお金を出そうとすると佐伯が人差し指を揺らしながらチッチッチっと言っている

凛は殴っていいのか迷った

『クリボーよ。ここは俺とサクちゃんが払うから出さなくていいぜ☆』

『まじ！？やったありがとう！』

その言葉に頬を染めながら

『良いって事よ。な、サクちゃん？』
と隣で携帯を弄っている櫻井に言う
『俺財布持って来てねーぞ』
沈黙が２秒ほど流れる
『え？……え、あ、わっかりましたー…１２０円でしたっけ？』
『１２００円です』
店員が冷たく言葉を返す
『本当によかったの？』
なぜか申し訳なくなった凛が佐伯に言う
『ぜ、全然無問題だよ！』
そう言って財布の中身をちら身する
『ていうかアイス買ってくれるんじゃなかったのかよ！！』
思い出したかのように視線を財布から携帯を弄っている櫻井に移す
『あ、あれ？言ってなかったっけ？あれ嘘だよ』
携帯を見たまま佐伯を見ようともしない櫻井

返す言葉も無く落ち込む佐伯

『あ、アイスくらいなら僕が買ってあげるよ！』

そう言いながら凛は、思った

こんな事になるなら自分で買えば良かった、と

そして、疑問に思った

なんでこの二人親友でやっていけてるんだろう？と

途中のコンビニでアイスを買って佐伯のテンションを上げてから

一番近い櫻井の家でストパーをかけることになった

前に佐伯にお金持ちと言う事は教えてもらっていたが想像を絶していた

高級マンション

まさにゴージャスだった

オートロックは当たり前でエントランスはホテルのような造り、道の左右は光り輝き大人な雰囲気を演出する

床は当然大理石だ

『ま、入ってくれよ』

地上１２階の櫻井の家

家の中はもっと凄かった

一目でわかるような高級品がづらーーーっと並んでいてリビングにはなぜか甲冑が置いてある

『こういうの父さんが好きでさ。１０００万以上するんだぜ』

丁寧に説明してくれるのは嬉しいがそんな事を言われては落ち着かない

『てか、二人とも一言も発さないけどそろそろ喋れよ』

『だって喋って唾でも飛んだら…』

言ったのは佐伯

『僕は普通に緊張して喋れない…』

『今日は誰も帰ってこないから大丈夫だって俺だって疲れちまうから楽にしてくれ』

鼻で笑いながらクールなナイスガイは飲み物を取りに行った

『だって楽にしようぜ。よいしょ』

佐伯は高そうな独りがけの椅子に堂々と座った

『順応早っ！！』

こいつのバカさ加減にはいつも驚かされる…

少ししてから櫻井が戻って来た

その櫻井の持って来た飲み物を飲み一息ついてからついに行動に移す事にした

『よし、取りあえず凛は上の服脱げ』

『はーい』

そう言われ普通に脱ごうとすると佐伯が声を上げた

『ちょっと待った！ちゃんと上を隠そう！』

『は？』

凛は佐伯の考えが理解できない

『お前完全に凛を女だと勘違いしてるな……だが、そう言うと思ってもってきてるぜ』

『さすが親友～！』

こいつら絶対変態だ……

凛は心からこいつらに失望した

『サクちゃん』

『ああ』

『エロいな』
『エロいね』

凛のバスタオル姿にエロスを感じている二人

完全に女として凛を見るその目はギンギラギンだった

『もう、早くやってよ』

『そ、そうだな。よし始めよう。』

正気に戻った櫻井は早速混ぜた溶剤を凛の髪に塗って行く

佐伯も2秒ほど遅れてから塗り始める

二人に塗ってもらったので案外早く終わり、ラップで頭を保温して後は待つだけとなった

１０分後……

『ねえ、バスタオルもういらないでしょ？』

『いや、今取られても俺らは鼻血を出す気がする』

『気持ちわる！』

『佐伯に関してはもう一回出てるしな…』

そう、先ほど塗ってもらっているときにバスタオルが落ちそうになり少しはだけただけで

佐伯は綺麗な赤い噴水をあげた

『あれはしかたないふぁろ』

今も鼻に詰め物をして押さえている

『ま、そろそろ洗って落としてこいよ。首とかにも付いてるからシャワー使って落としてこい』

『いってらっふぁい』

『わかった。んじゃお風呂お借りします』

待つ事２０分

『おい、クリボー遅くない？』

鼻血が止まった佐伯は第２波に備えて詰め物を量産していた

『多分普通にシャワー浴びてるな』

櫻井が本を読みながらジュースを飲もうとした瞬間その時がやって来た

『ふーさっぱりしたー』

『おおおおおおおお』

風呂上がりの凛のその髪を見た二人は驚愕した

『髪がストレートになるだけでここまで変わるのか…』

『髪の長さとかも良い』

そう、凛の髪は見事にストレートになっているのだ！そして、髪はセンターで分けられストレートになった事により伸びた髪は肩まで達し見た目はまんま女の子だ

言うなれば安田〇〇子の様な可憐さ

京都弁を教え込みたいものだ

そして、少しまだ濡れている髪に頬がうっすら赤くなっている凛

佐伯にとって刺激が強すぎたようだ

第二波が予測通り吹き荒れる

そんな佐伯をよそに櫻井と凛は普通に会話する

『問題は髪型をどうするかだな。ストパーの効力が切れる事を想定して髪は長さを生かしたものにした方が良いと思うんだが』

『別に僕はこのままでも良いけど。髪が目にかからないから楽で良いし』

『いや、それじゃ明日からお前が大変だ。学校には佐伯みたいな変態がまだ潜んでいる』

そういうと二人して鼻血を出している佐伯を見る

『？』

鼻血に気をとられていた佐伯は全く聞いていなかったようで先ほど量産した詰め物を詰めながら首を傾げている

凛と櫻井はその変態を見て大きくため息をついたのだった

早朝事変

凛の今日の朝は早かった

なんて言っても今日は高校デビュー1日目

否が応でもテンションはうなぎ上りになってしまう

昨日櫻井にもらった手鏡で髪が真っすぐなのは確認したし、髪型もあのままでは本当に女の子みたいだったので上野樹里くらいまで切ってもらった

まぁ、それでも女の子にしか見えないのだが

『彼女とか出来るかなぁ』

凛は制服に着替えながらそんな事を考えていた

『凛～ごはんよ！』

『はーい』

着替えを済ませ、今日の準備をした鞄を持って階段をご機嫌に下りリビングにいく

『凛おはよ～』

『先に頂いてるぞ』

『おっす、佐伯、櫻井おはよ。さて今日の朝ご飯はなに……』

『…』

『……』

『……どわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！なんでお前らが朝っぱらからウチにいるんだぁぁ！！』

沈黙からの咆哮

『なんでって俺ら友達だろ。朝一緒に学校に行ってなにが悪い。それに昨日あげた手鏡はブランド物で高いんだ。その分はメシを頂けなければ』

漬け物をバリバリほうばりながら櫻井はあたかも当然のように言ってくる

『俺はサクちゃんのいるところに我ありだから。いやいや、朝の凛も良いね！』

親指を天に突き上げてグーとやってくる佐伯

こいつは後で絶対に殺す

『そんな勝手に言われても困るよ！しかも手鏡は櫻井が無理矢理渡してきたんじゃん』

『櫻井君ご飯おかわりいる～？』

母が会話に割り込んでくる

『お願いします』

『お願いすなぁぁぁ！！！』

お椀を渡そうとする櫻井の手に思いっきりチョップを見舞う

『母さんもおかしいよ！なに冷静に家に入れてんだよ！』

『え～なんか凛のボーイフレンドが来たみたいで嬉しくって』

頬染めながら言う母

『いやいやいや！なに俺を女として見てんの！』

『だってかわいいんだもん？今日から私は凛を女と思って育てるわ！』

そう言って抱きついてくる

『変な宣言すなぁーーーー』

『凛俺は構わんぜ。つき合ってやってもいい』

そう言ったのはさっきから自分でご飯をよそっている佐伯

『はぁ？てめぇじゃねーよ』

『えええ～』

即座にそう言ったのは凛ではない母さんだ

『か、母さん？』

凛は思わず耳を疑った

『私が言ってんのは櫻井君でお前じゃねーよ。てかなにメシ勝手に食ってるんだよ。金払え。一万だ一万！』

『は、はい…』

そういって財布を出す佐伯

『本当に出すんじゃねーよ！』

凛はすかさずつっこむ

『てか母さん恐っ！』

一体どうしたというんだウチの母さんは

『聞けば櫻井君はお金持ちらしいじゃない…』

母さんはうつむきながら言った

『そうだけど？それがどうしたの？』

『凛、ウチはお金がないわ…だから…モロッコに行っていらないもの取ってら』

最後まで言わさず、すかさずビンタをする凛

『いやん、もう嘘よ。うーそ？』

そう言う母さんの眼は笑っていない

『お母さん凛君が寝ている間にこれで…』

櫻井はそう言って母さんにハサミを手渡す

そして凛の股間をみる母

そして、凛は思ったのだった……みんなバカばっかりだと……

生徒指導室

朝のＨＲの時間、凛はなぜか生徒指導室に連れてこられていた

『なんで、こんな事になるんだよぉ……』

机に突っ伏し早くもダウン寸前の凛

時はさかのぼる事３０分前……

朝の一悶着も終えて学校に着いた一同

『よし！じゃぁ行くか！』

櫻井がそう言って先頭をきって学校の門を通って行く

『凛の高校デビュー初日だからな。なんか騒ぎになったら俺たちがフォローしてやる』

佐伯も凛にそう言いながら門を通る

高校デビューと言うのはこんなにも気を引き締めなくてはならないのかと凛は心の中で思った

『よし、僕も行こう』

いざ、高校デビューの第一歩！

と足を踏み入れようとしたそのとき笛が高らかになった

立ち止まり鳴った方を見ると朝の挨拶を門でしている先生が笛を鳴らしていた

あーあ、誰か校則違反したな、起こられるぞぉ

と凛は思いながらそのまま足を進めようとする

すると、また高らかに笛が鳴る

うるさいなぁと思って振り返るとドシドシ歩きながらこちらに向かってくる

誰だよ体育の坂野の笛無視してるの

と辺りを見渡していると生徒のほとんどが凛に目を向けている

『？』

『お前だよお前！』

と坂野が怒声を上げながら凛の前で止まった

『えええぇぇ！僕ですか！？』

心当たりの無い凛は驚きすぎて悲鳴のような声を上げる

『僕じゃないだろ。今そう言うの流行っているのかもしれんがちゃ

んとした言葉で話しなさい！』

『え？僕って言ったらダメなんですか！？』

『当たり前だろ！女の子が僕なんて言うんじゃない！それに男の制服なんて着て来てお前は一体何…を……』

途中で話すのをやめて凛の顔をマジマジと見てそして制服を見る

『え？いや、ほら、僕男ですよ！何言ってんですか！ちゃんと見て下さいよ』

凛は必死に男だと主張するが先生は全然聞いていない様子だ

助けを求めようと佐伯と櫻井に目を向けるが二人の姿は校舎の中に消えて行った

そ、そんな…愕然とした凛をよそに坂野はまだマジマジ見ている

そして

『……アリだな』

っと頬を赤らめ坂野先生がボソっと言った

そして周りの生徒からも

『うん、アリだ…』

『アリです』

『アリでごわす』

とうなずきながら見てくる

『ていうかあんなに可愛いヤツいたっけ？』

『いや、俺も初めて見たな、坂野の説教終わったら声かけようぜ』

とコソコソ話している

なんと言っているのか聞き取れない凛は『？』と首を傾げる

『いやいや！いかんいかん！』

坂野はブンブン頭を振って冷静になろうと必死だ

『と、とにかく家に一旦帰って女子用の制服に着替えて来なさい！担任には私から伝えておくから』

『女子用の制服なんて無いですって！ほら生徒手帳見て下さいよ。男でしょ？』

鞄から生徒手帳を取り出し坂野に見せる

『…これのどこがお前なんだ！ムックの方がまだ似てるわ！』

『ひっひどい！』

『そこまで反抗するなら生徒指導室まで来い！』

『え、ちょ、ちょっと待って下さいよ！えぇぇぇぇぇ』

『失礼しました…』

生徒指導室から解放された凛は意気消沈していた

何を言っても信じない坂野を母親話させてなんとか無罪放免となったが

『お前、下のいらないもの取った方が…』

と去り際に坂野にヒドい発言をされた

『はぁ～今1時間目の授業中だよなぁ。入りづらい……』

そう言いながらも優等生の凛の足はトコトコと教室に向かって進んで行く

教室に着いた凛は深呼吸をしてドアを開けた

ガラガラガラ

『すいません、遅れ…』

『きゃーーーー』

『おおおお～～～』

ました。と最後までいう前に歓声が沸き起こる

『え？えぇ？』

思わず後ずさってしまう凛

『おいおい、マジで女じゃん』

『まじ？スッピンで私たちより可愛いとかどんだけ』

『可愛いでごわす』

クラス中が凛の可愛さに騒いでる中、佐伯が歩いて来て

『マジで連れてかれるの気づかなくてごめんな！』

と言って動揺する凛の手を取り席まで連れて行く

『なんもされなかったか？』

席につくと申し訳なさそうにしている櫻井が声をかけてきた

『まぁ、なんとか大丈夫だったよ。メチャクチャ疲れたけどね……』

そう言って肩から力を抜き一気に溜め息をつく

『でも高校デビュー大成功だな☆みんな凛のこと見てるぜ』

佐伯が自分の事のように笑顔だ

『凛だれかに取られちまうな…』

意地悪そうに小声で佐伯に耳打ちする

『え？なんでだよ！』

佐伯の眼球が飛び出しそうだ

『そりゃ、こんなに可愛いし変態共がほっとかないだろ。それに女子だってこういうの好きなヤツ沢山いるぞ』

『そ、そんな……』

あからさまに落ち込む佐伯

『本当！？彼女できるかな！？』

その逆に身を乗り出しその話にがっつく凛

『そりゃ出来るさ。彼氏が出来る可能性のほうがでかいがな。』

『えぇぇえ……』

そう言われ回りを見ると男子の机が若干、いや、かなり凛寄りになっている

こ、こいつらマジだ……

凛は背筋から冷たい物が流れるのがわかった

『滝田！』

そんな事を思っていると国語の先生の安西が声を上げた

『は、はい』

こんな騒ぎにしちゃったから絶対に怒られる～

と思ったのだが先生の言葉は

『先生も良いと思うぞ。正直タイプだ』

安西お前もか！！！

しかも、誰かさんのように親指を突き立てグーっとしている

凛は理解した。

あ、そっか。最近もしかしたらとは思っていたけど僕の周りはバカしかいないんだ。と

そんなこんなでイメチェン後初の授業も無事終わり、次の体育の準備をしていると事件は起きた

『凛君おはよー♪生徒指導室で先生に怒られたの？』

『アホ坂野になんかされなかった？』

『マジだ超可愛い！』

『肌白すぎでしょ～』

『凛クーン』

『今日の放課後ヒマ？』

『ちょっと後ろから押さないでよー凛君が危ないでしょ！』

と今まで話した事も無い女子が大量に群がって来たのだ

しかも、噂を聞いたのか他のクラスの女子まで教室に入って来てとんでもないことになっている

『あ、あの、い、いや』

今まで女子とあまり話した事の無い凛は動揺しまくりだ

ぼ、僕一人じゃ対処できないよ…

と思ったその時、勇者（佐伯が）が現れた

『ウジ虫共！凛から離れろ！！』

おお、佐伯かっこいいじゃないか！抱かれたくはないけどかっこいいじゃないか！

凛は初めて佐伯をほめた

『凛は次の授業の準備で忙しいんだ！だから…』

が、その声の方向に女子が『はぁ？』っと一斉に振り向く

１対５０の圧倒的不利の中、佐伯のとった行動は

『あ、いや、すいません…勝手にどうぞ』

ええええええ！

『きゃーーー凛くーん』

ドドドドドッパーン

と、凛は女子の波に飲み込まれた

そして、チャイムが鳴るまで女子による女子の為の凛いじりは続けられたのであった……

鮮血の体育

チャイムも鳴り凛達は体育館に向かっていた

『も、モミクチャにされた……』

両肩を抑え。壁にもたれながら歩く凛

『だ、大丈夫？』

櫻井の影から心配する佐伯

『うるさい！小心者！僕に近寄るな』

『ひ、ヒドい。怖かったんだから仕方ないだろ』

凛は先ほどの佐伯の行動に猛烈に怒っていた

『サクちゃんだって助けなかったじゃんか』

責任転換しようとする佐伯

『俺ははなっから諦めてたからな。女子の怖さはよく知ってるつもりだ』

櫻井はさらっとその攻撃をかわす

『中途半端なことされるよりマシだよ』

凛も佐伯一人を攻撃する

そして結果的に佐伯は落ち込んだ

『てか凛体育の準備の時気をつけろよ』

そんな佐伯を放っておいて凛のそばに寄り耳打ちするように言う櫻井

『ん？なんで？』

『お前が今から行く男子更衣室は魔の巣窟だ…』

『？意味がわからないけど？』

首を傾げながらいう凛に対し『行けば分かるさ』っと櫻井はぼそっと言った

そんなやり取りをしていると更衣室に到着し、凛がドアを開ける

ガラガラガラ

開けた瞬間視線が一気に凛に向く。がすぐに視線が外れる

ん？気のせいかな？

取りあえず凛は、いつもの部屋の角の棚に体育ジャージの入っている袋を置く

いや、やっぱりなんか見られてる気がするな

背中に視線を感じるので周りをそーっと見るとみんながシュバっと一斉に視線を外す

ぜ、絶対に見られてる…

そう思ったと同時にいつもとみんなの着替えてる位置が違う事に気づいた

凛の隣と後ろでいつも着替える佐伯と櫻井の場所には違う男子がいる

さっき休み時間に男子がいない事に気づいてはいたけど更衣室の場所を確保する為だったのか…

数秒考えてからここで着替える危険性に気づいた凛は荷物を持って櫻井のところに歩いて行く

『言った意味が分かったようだな』

シャツを脱ぎながら答える櫻井

『怖いくらいに分かりました…のでトイレで着替えて来ます！』

『正解だ。行ってこい』

そう言って凛は更衣室を出て行く

扉が閉まる時に聞こえた男子全員（佐伯、櫻井を除く）の舌打ちが

聞こえたような気がしたが多分気のせいだろう

『それじゃあ二人一組で準備運動始めろー』

『佐伯一緒に…』

坂野先生の一声でいつも通り凛は佐伯と組もうと近寄る

『滝田一緒にやろうぜ！』

『凛君一緒にやろう』

『いや、俺と組もうぜ』

『俺と…』

一斉に変態達が凛を取り囲む

『いや、あの、僕は佐伯と…』

『いっつも佐伯じゃつまんないだろ？たまには一緒にやろうぜ』

『いや、準備運動に楽しさを求めてないから大丈夫です』

『はいはい、みんな失礼～凛は俺とやる（犯る）んだから散れ散れ～』

佐伯が凛を取り囲む男子をどかしながら凛の方に来た

『くそっ覚えてろよ！』

有名な捨て台詞をはきながら散り散りになる男子

『助かった～サンキュ佐伯♪』

『良いって事よ』

（お前に触れれる大チャンスだからこの期を逃さないぜ）

『ん？なんか言った？』

『いや、何でも』

その後普通に準備運動を始めたのだが異変はすぐに起こった

それは、背中をくっ付け合い腕を組み相手を背中に乗っけるあの有名な準備運動の時だった

『凛痛くないか？』

『だ、大丈夫だよ。』

佐伯が下で凛が上のようだ

かなりのけぞっているため凛のTシャツはお腹が丸見えになるくらい捲れている

『へぶっ』

『おわっ』

『グフッ』

凛の周りで奇声が発せられている

『え？なに！？』

辺りを見るとみんな血を出しながら凛を見ている

『みんなどうしたの！』

『いや、お前のお腹が余りにキュートだったからつい…』

『鼻血かよ！てかお腹見たぐらいで鼻血出すな！』

『クソ！俺もそっちが良かった！！』

佐伯は思わず本音をポロリ

『お前もか！』

すかさず凛の鉄拳が飛ぶ

『滝田！いいから続きをやりなさい！』

そう言ったのは坂田先生

だがヤツも鼻血を出している

『この変態教師！』

『変態で結構！』

な、なんてやつだ……開き直りやがった

準備体操も終了し、跳び箱の授業が始まった

先週も同じ授業だったのだが僕は跳び箱が大の苦手だ

しかも今日は視線が気になりかなりやりづらい

『滝田の飛ぶ姿で男子は殆どキュン死にしてるな』

『う、うん。俺もキュン死にしてます』

凛の飛ぶ姿を見ながらは櫻井と佐伯は話している

視線の先で凛は一生懸命に飛んでいるが5段すら飛べない状態だ

『えい！』

ストン

跳び箱におすわりするだけ飛び方

『う、う、全然飛べる気がしないよ…』

『滝田！もう一回だ！』

坂田のヤツなんで僕ばっかりにやらせるんだ

他にも飛べないヤツいるのに…

『はい…』

またスタート位置に戻りは走り出す

『えい！』

ストン

周りで見ていた男子＋教師の心境

（可愛いなぁ～癒される）

（飛んだ後の不服そうな顔がまた良い）

（飛ぶ時の尻がいいな）

（なんかもう好きだ！）

『飛ぶの手伝ってやるよ』

そんな事を思われているとは夢にも思ってない凛に佐伯がやさしく声をかけた

『仕方ない俺も手伝ってやるか』

櫻井はいやいやといった感じだ

他の男子達はその手があったかと言わんばかりに各々が頭を地面に叩き付けている

『二人ともありがとう～……で、どうやってやるの？』

『そうだな。飛ぶ瞬間に　俺と佐伯で凛の体を持つってのはどうだ？』

『そ、それで行こう！』

鼻からフンフン息を出しながら佐伯が言う

『なんで佐伯は鼻息が荒いの？』

『男の性だ。気にしないでやってくれ』

『んじゃ、いくよ』

『バッチコーイ！』

なんでアイツあんなに気合い入ってるんだよ

率直に疑問に思うがスタート位置から走り出す

そして、左右に佐伯と櫻井が待機している跳び箱にジャンプする

『えい！』

とんだ瞬間右にいる櫻井の手はがっしりと凛の太もも辺りをつかむ

遅れて佐伯も凛をつかむ

ムギュ

『うわ～！！』

いきなり暴れる凛に戸惑い櫻井がぱっと手を離す佐伯は掴んだままだ

そのままマットに倒れた凛だがその姿に男子＋教師はまた赤い噴水を噴いた

『いたたたた…佐伯どこ掴んで…』

おでこをさすりながら後ろを見ると凛のお尻が現わになっていた

『うわーーーー！！』

すぐさまズボンを上げる

『白桃だ』

『綺麗な尻だった』

『男のケツじゃねーな』

皆各々の意見を述べながら鼻血がぼたぼたと流れている

『さ、佐伯…』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

凛の怒りが地鳴りと鳴って佐伯に迫る

『い、いや。これは不可抗力で！』

後ずさるが後ろには櫻井が。

『サクちゃん！俺悪くないよね！』

櫻井は首を横に振る

『短い付き合いだったな。先に天国で待っててくれ』

『そ、そんなぁぁぁ。うぎゃぁぁぁぁぁ』

悲鳴が体育館にむなしく響き渡った

その後、佐伯がどうなったかは……

皆さんのご想像にお任せしよう

なんてこったＨＲ！！

『いい加減機嫌直してくれよ～』

『うるさい。消えろ』

『ひ、ヒドい…』

『自業自得だろ。あの状態で欲をかいて凛のケツを触ったから悪いんだぞ』

４時間目のＨＲの授業をを受けながらくっちゃべる三人

『おし、お前ら今日は学園祭出し物何やるか適当に決めろ～』

学校で１、２を争うダメダメティーチャー笹木がそう言いながら雑誌を片手に委員長と席を変わる

今日の彼の読書内容はヤングアニマルだ

こいつは生徒が周りにいるのに平気でエロいところを見る

『私、委員長の御手洗春男がこの場を仕切らせて頂きます。書記！御題を黒板に』

眼鏡をくいっと上げてクラスで一番浮いている御手洗が仕切りだした

『それでは、何かこれがいいと言う物がある人はいませんか？』

生徒それぞれがあれこれ考え始める

『凛はなんかやりたいことないのか？』

『ん～特にないなぁ』

『俺にはいい案があるぞ☆』

自身満々の佐伯に冷たい視線を送る櫻井と凛

『なんだよ！その眼は！もういい。みてろ！』

そういってガタっと席を立ち言い放った

『メイド喫茶やろうぜ！！』

シーン

『はぁ？きも～』

『絶対はんたーい！』

『男子で勝手にやってろやー』

『俺らが言い出したわけじゃねーよ！アイツの単独行動だろ！』

『そうだそうだ！俺らは関係ねーよ！』

『いまさら古いんだよ！』

女子と男子からの大ブーイング

うわ～～～～可哀想……

凛と櫻井の心境は同情！

それ以外になかった

教室がざわついているなか佐伯が震えながらこう言い放った

『……って櫻井が言ってたよ…』

ええええええーーー！！！

なすり付けおったー！！

コイツ平然と親友にこの状況をなすり付けおったーー！！

最低だコイツ！！

佐伯のへたれ加減に失望した凛の横でナイスガイがガタっと席を立った

全員の視線がナイスガイに向けられる

佐伯がなすり付けた事を皆が理解している中

注目の第一声

『お前ら見たくないのか？』

『？』

え？なにを？

皆がそう思っただろう

『俺は見たい』

だから何をだよ！

『凛のメイド姿を！』

『は？』

凛の声だけが発せられ

静まる教室

先生のヤングアニマルをめくる音だけが聞こえる

そして…

『みたーーーーーーーーーーい！！！！！』

教室が揺れた！！

歓声に似たような声を凛以外の全員が出している

えええええええええ！！！！！

『ちょ、みんな！』

『いやー俺実は良い案だと思ってたんだよ』

『実は私も～♪』

『決まってよかったな～』

『早速どんな衣装が…に似合うか相談しよう！』

誰も凛の言葉など聞いてはいない

見てはいるが聞いてはいない

凛君のメイド…凛君のメイド…

心で何回も連呼しながら凛を見つめる視線

（こ、怖い…学園祭当日休もう…）

凛はこの日軽くトラウマになるくらいの恐怖を味わい

そして、学園祭の歴史に凛の伝説ができるきっかけができたのだった…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2842i/

クセッケ！！

2011年1月1日02時42分発行